

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 乙第 2437 号

The use of short versions of the Japanese WAIS-III to aid in differentiation between Alzheimer's disease and dementia with Lewy bodies

(アルツハイマー病とレビー小体型認知症の鑑別のための日本版 WAIS-III 簡易実施法の有用性の検討)

太田 一実 (おおた かずみ)

博士 (医学)

### 論文内容の要旨

レビー小体型認知症 (DLB) はアルツハイマー病 (AD) について出現頻度の高い変性性認知症であり、初期から視覚認知や視覚的注意力が低下する傾向が高い。これまで多数の研究者が DLB と AD の鑑別のための認知機能の特徴を報告しているが、ウェクスラー成人知能検査第 3 版 (WAIS-III) を用いた研究はほとんど認められない。WAIS-III は世界的に広く使用されている成人用知能検査であり、13 の下位検査から構成されている。現在、日本で刊行されている WAIS-III は、適用年齢が 89 歳となり、以前より高齢者に利用しやすくなったが、WAIS-III の長所である課題の豊富さや難易度の高さによって、特に高齢者に時間的・体力的・精神的負担がかかることが問題であるという指摘もある。そのため、高齢者に WAIS-III を実施する際には、状態像に応じて簡易実施法の使用も考慮に入れる必要性が生じる。本研究ではまず WAIS-III を用いて、AD と比較した時の DLB の認知機能の特徴を明らかにした。続いて、先行研究で高齢者の認知機能評価に有用性が認められている 4 種類の WAIS-III 簡易実施法を用いて、WAIS-III の簡易実施法は DLB の認知機能評価にも利用できるのか検討した。対象者は probable AD と診断された 83 名 (AD 群)、probable DLB と診断された 33 名 (DLB 群)、健常と診断された 83 名 (健常群) とした。WAIS-III における 3 群間の認知機能の特徴を検討するため、一元配置分散分析と Tukey 法を用いて、言語性 IQ (VIQ)、動作性 IQ (PIQ)、全検査 (FSIQ)、4 つの群指数 (言語理解、知覚統合、作動記憶、処理速度) の得点を 3 群間で比較した。その結果、DLB 群は AD 群に比べて動作性 IQ と処理速度が有意に低いことが示唆された。さらに、全下位検査を実施して算出された IQ (本来の IQ) および群指数 (本来の群指数) と簡易実施法によって算出された IQ および群指数の相関、誤差をそれぞれ検討した結果、「知識」「類似」「算数」「数唱」「絵画完成」「符号」「積木模様」の 7 つの下位検査を使用した簡易実施法が、本来の IQ および本来の群指数との相関が高く誤差が少ないことが明らかとなった。WAIS-III の簡易実施法は、DLB の認知機能の特徴を捉えるために有用であることが示唆された。